気が付いたら、転生してた……はぁ？

汐美 潮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
気が付いたら、転生してた……はぁ？

【Ｎコード】
Ｎ４７７３Ｖ

【作者名】
汐美　潮

【あらすじ】
え？　俺死んだ？　おい、それどういうことだよ！　っておい、じいさん、そんな謝んなよ。顔あげてくれよ。は？　転生？　わかった。してやっから泣きやんでくれよ。な。よしよし。
そんな感じてはじまります。

情状酌量の余地はあると俺は考える。（前書き）

初登校

間違えた

初投稿

情状酌量の余地はあると俺は考える。

……うん。ちょっと待とうか。これどーゆーことよ。

そんなことを考えながら、俺こと加納　悠太（かのう　ゆうた）は汗をダラダラとかきながら部屋の真ん中で立ちすくんでいた。何故かって？　聴いて驚くなよ？　朝起きたら知らない人、しかも五歳児になってた。

いや、おかしくなんてなってねぇからな、そこのお前今すぐケータイを離せ。黄色の救急車はいらねぇから。
でも、お前の気持ちも分からなくはない。現に俺も始めは夢かと思ったしな。けどな、なんだか夢にしちゃあリアルなんだよ。意識も思考もハッキリしてるしな。

こうしてても仕方ないから、とりあえず現状を整理してみようと思う。

俺は公立高校に通うふつうの高校生だ。背が低いことを除けばどこにだって居る少年だ。
それで……何時も通りに学校行って帰ってきて、宿題こなして寝て、現在に至る。

……あれ、夢じゃね？　いやいや、それはさっき否定したばっかじゃねえか。ループすんなよ。でもこれじゃあ意味わかんねぇな。

ん？　あれ？　頭が……変だ、って、いだだだだだだっ！
あったまいでぇー！！

はあはあ、ひでー目にあった。あれ？　でもなんか思い出してきたぞ。

なになに、加納悠太　五歳　幼稚園に通う園児　両親は共働きでほとんど家に居らず、実質一人暮らしの状態

おい、親なにやってんだよ。実質一人暮らしってただの育児放棄じゃねぇか。よく生きてこれたな俺。

ん？　まだあるのか。

加納悠太　神のミスによって死亡　計らいによりファンタジーな異世界に飛ばされそうになるが、それを拒否　過剰ともとれる能力も断るが神が譲らず、お互いに妥協する結果となった　世界選択のとき悠太が普通の世界を希望したため、それなりに普通の所に送ってもらった　トラウマを作らないために記憶の覚醒は五歳児になってからとなった　そして現在、となる。

ああ、そういえばそうだったね。まったくあのじいさん（神）本当に厄介だったな。俺キレたいのにメチャクチャ謝ってきたからな。あれじゃあ俺が悪人みたい見えるだろうな、端から見れば。理由訊いたらペンを誤って下に落っことしちまったんだと。それじゃあ、しゃーねぇよ。赦したよ、俺。

あん？　甘いって？　おいおい考えてもみろよ、ペン落としただけで人が死んじまうような環境だぜ？　どんだけ神経質にならなきゃならねぇ環境だよ。俺なら発狂するぞ。神といえど正当な理由が無いと罰があるらしいしな。可哀相だろ。流石に。

んなわけで、俺はじいさんの罰を軽くするために転生したわけだ。事務的な救済措置らしい。能力云々はじいさんの罪意識から言い出したもので、仕方ないからちょっとだけなら良いと言っておいた。俺としては別にいらない。なくても別にこまんねぇだろ。普通の世界だし。

あ、でも、身長は欲しいかな。結構悩んだし。

お、能力が分かった。えー、なになに。

努力すれば何でも出来る才能
驚異の身体能力
優秀な頭脳
身長１８０センチオーバー

おいおいおかしいだろ。最初の三つなんだよこれ。じいさんは俺に何をさせたいんだよ。

てか、真ん中二つあれば努力とか関係ないだろ。大概のことは、はじめからできるじゃねぇか。保険か？　保障しあってるのか？

けど身長は感謝。憂いは晴れたよ、じいさん。

けどまぁ、常識内で収まった方か。断る前は魔術とかなんなとか怪

しくて危なっかしい事言ってたからな。自重したんだと思う。

こんなもんかな。難しい事は追々考えてもいくとしよう。

なんだか変なことになっちまったな〜

……幼稚園行こ。

色々あって、今はバスケしてます。（前書き）

庭です。

間違えた

二話です

色々あって、今はバスケしてます。

こんちは、加納　悠太だ。あれから――転生してから数年経ち、今は小学六年生だ。

あん？　跳ばすな？　手抜くな？　……わかった。掻い摘んで説明しよう。

七年経った。
色々あった。
以上。

ちょっ、石投げんな。わかった。わかったから止めてくれ。痛いから。ふう。でもどれをどのように話そうか。

「おい悠太。何惚けてんだよ」

俺の座っている席に声をかけながら近付いてくるのは髪の毛がツンツンしている同級生、竹中　夏陽（たけなか　なつひ）、俺の友人である。

「ああ、ちょっと考え事してた。て、なんだ？」
「なんだじゃねぇよ。さっさと部活行こうぜ。時間もったいねぇよ」
「あいよ……あれ？　今日女バスの日だろ。部活ないじゃん」
「……そうだった」
夏陽は苦虫を噛み潰したような表情をした。本当に夏陽は女バス嫌いだな。
「くそっ、なんだってあいつらなんかの為にコート空けなきゃなんねぇんだよ！　ホント納得いかねえ！　あいつら練習してねぇじゃねえか！」

吐き出すように夏陽は苛立ちを言葉にしていく。言葉から侮蔑の感情も滲み出ていた。
我慢できなくなったのか、放課後で留守の席をガスガス蹴っていた。
「落ち着けって。けど女バスだって楽しそうにやってるじゃねえか」
「楽しそう？　あんなんふざけてるだけだろ！」
あーあ、こりゃ相当きてんな。そろそろ我慢も限界ってか。
「でも、それもあと三週間でお終いだからな。我慢すっか」
「あん？　なんだそりゃ？　廃部にでもなんのか？」
「ああそっか。悠太はこの間は家の用事で休んだんだったな。じゃあ知らねえか」
「んで？　なんかあったんか」
「ああ、女バスと試合して勝ったら、女バスが廃部になるって決まったんだよ」
「……まてまて、穏やかじゃねぇな。それまたどうして」
「真帆と言い合いになってな。あんまり自信たっぷりに言ってくるもんだから。そうふっかけてやったんだ。したら真帆の奴面白いくらいに食い付いてきたぜ。おかげでなんの躊躇いもなくあいつらをつぶせるぜ」
「いや、駄目だろ。顧問が許可するわけねぇよ」
「したぞ。のりのりで」
「はぁ？」
「だからしたんだって、許可。けどその代わりに負けたら。女バスの時間を減らして男バスに廻すって話が無しになるんだけどな。問題ないだろ。どうせ勝つし」
そう言いきると夏陽はまんぞくそうに鼻を鳴らした。
そうか、俺の知らないところでそんな話があったのか。なんか疎外感を感じる。
「うん。まぁわかったよ。俺でないけど」
「はぁ？！」
夏陽は驚いた顔をして、こちらに迫ってきた。近い。暑苦しい。

「ど、どうしてだよ。裏切る気か？！」
「夏陽落ち着け。第一に俺は転校してきたばっかで女バスとの諍いも聞きかじった程度だし、そこまでやる気がない。第二にまだバスケ部に顔を出してすらいない俺が試合にでれると思うか？　俺の実力はまだ夏陽しかしらないんだぜ？　出られるはずがねぇだろ。てかおまえ等があれに負けるはずないから安心しろ。普通に勝つか、あいてを泣かすくらい圧倒的に勝つかの違いだけだ」
「……わかった。けどそれだと俺ら男バスが弱いみたいに聞こえるぞ」
「弱くはねぇよ。後、事実だろ。俺が入ったら圧倒するのは」
「……ああそうだな。けど今だけだ。直ぐに俺は追い抜いてみせる」
強いまなざしで、夏陽は俺に宣言した。
「ああ、さっさと駆け上がってこい」
期待を込めてそう返してやった。

さて、夏陽との長話も終わり、適当に切り上げたところで、ザックリ俺の今までを振り返ってみたいと思う。

俺が今まで住んでいたのは長野の奥地の田舎だ。全校生徒が片手で数えられるような小さな小学校に入学。そこに通っていた先輩がバスケをしていて俺も影響を受けてはじめた。
じいさんから授かった反則も相まって、みるみる上達していった（先輩がお前はチートキャラだと泣きながら言っていた。無視したが）。
そして両親の都合で慧心学園に転校することになり、六年に転入した。
夏陽との出会いは転入一週間前偶々公園で出会い。お互いにバスケ

をやっている事で意気投合。試しに１ＯＮ１でもするか。という流れになり、そして夏陽フルボッコにしてしまった。
よくよく考えてみたら先輩（中高生）相手に互角以上の闘いをしている俺が小学生に（同い年ではあるが）本気をだすのはオーバーキルだと気づいた。身長もだいぶ違うし（現在１７５センチ）。

それ以来――といっても二週間も経っていないがライバル認定を受けて今に至る。関係は良好である。

それにしても気懸かりなのは女バスが試合を受けた事だ。言っては失礼だが女バスは絶対に男バスには勝てない。唯一まともに動ける湊　智花（みなと　ともか）という女の子も、ダブルもしくはトリプルチームでつかれたらどうしようもない。勝算はないに等しい。俺が顧問だったら間違いなく断る。

だとしたら、何か秘策があるのか？

……止めよう。所詮推測の域を出ない。それに俺には関係ない話だ。あの活き活きとバスケをやる子達を見られなくなってしまうのは残念ではあるけどな。

俺は教室をあとにした。

夏陽、お前またケンカしてきたのか？（前書き）

産婆

…間違えた

三話

夏陽、お前またケンカしてきたのか？

「大変だ！　悠太！」

夏陽の「俺、女バス潰すわ。マジで」な発言から何日か経ったある日。今日も今日とて惰眠を貪っていた俺こと加納悠太のもとに、夏陽はなんだか焦った様子で現れた。

机に伏せていた俺はのっそりと起き上がり、目をこすりながら応えた。

「どうした？　ああ、算数のプリントか？　残念だったな。この間配られたのはもう提出しちまったから頼っても無駄だぞ」

「算数の話じゃねぇよ、バカ！　バスケの話だよ！」

「あー、バカって言ったな。もう宿題手伝ってやんねー」

「っと、わ、悪い。悪かった。だから手伝ってくれ」

「お、おう」

結構必死になったな。夏陽にとってはかなり俺の宿題対策は重要らしい。

さて、からかうのはこれくらいにしとくか。

「それで、なにが大変だってんだ？」

「ああそれが……って悠太！　俺のことからかっただろ！」

ばれたか。

「まあいい、それよりもこれは真帆が自慢してきたことなんだが――」
「それはそれはムカついたと」
「そう！　ってそれはこの際置いておく。癪だけど。それでなどうも女バスが試合までの間コーチをつけるらしい」
「コーチだと？」

あれ？　顧問の……名前忘れた。そいつがやってんじゃなかったのか。やってねーってことはそいつは素人か？
だとしたらそいつよく顧問引き受けたな。面倒だろうに。子供たちの為だってんならちょっと尊敬するな。

「ああ。真帆曰わくなんかすげーコーチらしい」
「すげーコーチ？」
「すげーコーチ、だ」

ふうん。おそらくそいつが女バスを勝利に導く、と顧問が考えている人物なのだろう。が、そうだとしたら――

「――あほくさ」
「なんだと！？」

あら、口に出してたか。

「だってそうだろ。どんなすげーコーチがこようが期間は二週間とちょっと。その期間でできることなんざ高がしれてる。精々パスワークを良くするとか、レイアップ（走り込んでシュート）やゴール下のシュートを決められるようにするとか位のことだろ。それじゃあ脅威にはなりはしないさ。場数や練習時間の差は覆らないし、し

っかりディフェンスして相手がミスしたところを突けば、男バスの勝利は揺るがないさ。俺が保証する」

そう一気に言いきると夏陽は顔に安堵の表情を浮かべた。

「そ、そうだよな。なんだよ真帆の奴。びびらせやがって」
「そーそー、気負う必要なんかないない」
「だな。悠太、一緒に頑張ろうぜ」
「いや、俺は出ないけどな」
「……はぁ？！　どうしてだよ？！」
「いやいや、前も話した通り、俺転校してきたばっかでまだバスケ部に正式に入部してねぇし。それに俺の実力知ってんの夏陽だけだろーが。試合出る出ない以前の問題だ」
「そっか、そうだったな」
少ししょぼくれたようすで夏陽は呟くように言った。それ程楽しみにしていたのだと思うとなんというか、少し嬉しいな。ライバルのしがいがあるというものだ。
しかしああは言ったもののやはりそのすげーコーチとやらは気になるな。
一度見ておくか。

夏陽、お前またケンカしてきたのか？（後書き）

すばるんは次だね。

……こいつらなにやってんだろ？（前書き）

ヨンハ

間違えた

四話

もうこれ限界に近い。

……こいつらなにやってんだろ？

どうも、加納悠太です。あれから数日経ち、バスケ部に正式に入部した。夏陽にはえらい歓迎されたが、ほかの奴らは微妙な顔してた。まあ当然だわな。最後の年だから団結して臨みたいのに異分子が入り込んだわけだからな。それもチームに不足していた『高さ』をもった選手な訳だ。監督も悩みどころだな。
古参でチームワーク優先にするか、それをバラしてでも高さを入れるか。
臨機応変に使うこともできるが、それだと上では通じないだろう。
練習不足の穴を突かれ、崩壊する。

まあ俺はそこまで深く考えてはいないがね。
楽しくやれればそれでいい。

それはそれとして、今日は慧心にすげーコーチ殿が来る日である。
……らしい。けど――

「……あの子ら何やってんの？」
「……俺が知るか」

俺の呟きに夏陽は素っ気なく、それでいて同意するような声色でそう返した。

状況を説明すると、俺と夏陽は今体育館の入り口に居る。そこで閉められたらドアをほんの少し開けて、覗き込むような体勢で居る。

俺は堂々とギャラリー（体育館二階）から見ようと言ったのだが、夏陽が凄く嫌がった為今に落ち着いている。
なんでも三沢真帆に見つかってゴチャゴチャ言われるのを避けたいらしい。
まぁ、下手したらスパイ扱いで不用意に男バスの評価下げちまうかもしれないからな。問題は起こさないに限る。

んで、何でさっきあんな事言ったかと言うと、女バスがなんだか妙な事し始めたからだ。

集合して、着替えに言ったかと思ったら全員メイド服で出てきた。

……うん、本当に何やってんのかね？　あらためて言葉にしても意図が分からない。

もしかして指示なのか？
あれで出迎えろと？

いや、いくら何でもそれは……あの養護教諭やりかねんな。あいつ変態だし。
ともあれ女バスはあれ（メイド服）で出迎えるらしい。大丈夫か？

――ガラッ。

お、来たか。やっと顔をおがめ――
『お帰りなさいませ！　ご主人様！』

ピシャン――

おいい！　ドア閉めちまったぞ！　帰るのか？　帰っちまうのか！？

――ガラッ

あ、また入ってきた。

『お帰りなさいませ！　ご主人様！』

リプレイだぁー！　止めて！　今コーチさんの顔凄くひきつってるから、もう止めて！

あ、女バスが着替えに行った。どうやらやっと始まるみたいだ。
それにしてもあのコーチ若いな。多分高校生じゃないかね？若いコーチを否定する訳じゃないけど、教えられんのか？
やるのと教えるのじゃ大分違うだろうに。
むぅ、コーチとしての実力がわからん。まぁ始まるまでの辛抱か。
女バスの皆さん、早く着替えてな。

「さあ、お手並み拝見だね。夏陽。……夏陽？」
「ひなたのメイド服……」

トリップしてやがる。なんだ夏陽。お前ひなたって子が好きなのか？　どれだかわからねーけど。
とりあえず夏陽、その鼻から溢れ出した愛を拭きなさい。汚いから。
後、お前そんなキャラじゃねぇだろ。

あれ、変な電波来た？
まあいいや。

……こいつらなにやってんだろ？（後書き）

すばるん出たけど微妙だったね

これには俺も閉口せざるを得ない（前書き）

五話

間違えてない

これには俺も閉口せざるを得ない

前回のあらすじ。

夏陽の鼻からラブファントムが噴き出した、まる。

というわけで俺と夏陽は体育館を覗き込んでいる。
いや決してやらしい意味じゃねぇからな。偵察だ、偵察。

でも、もう帰ってもいい気がしてきた。なぜなら、

――「うぅ……ひっく……えぐっ」――

香椎（夏陽から訊いた）が号泣していて、完全に滞っているからだ。
夏陽曰わく香椎は自らの体格（主に身長）を気にしていて、そのことに触れられると泣き出してしまうらしい。
なかなか難儀な性格をお持ちのようだ。ある意味初見殺しだろ。小学生であんだけ身長あれば誰だって指摘すんだろ。

だからか知らないが高校生コーチがさっきから平謝りしている。
……光景だけ見てると凄くシュールだ。危ない場面に見えなくもない。

「悠太」

ポンポンと俺の肩を叩いて呼ばれる。

「なんだ？」

「帰るぞ」

「帰るって、まだ練習見てないだろ」

「時間だよ。あいつらはもう練習出来ねぇよ」

時計を見てみると、既に終了間近となっていた。

「……まじですか」

「ああ、マジだ。クソッ、こんなんだったら帰っても練習してるんだった」

夏陽は腹立たしげに舌打ちした。

「そうだな。誘って悪かった」

「悠太を責めてる訳じゃねぇよ。ただ、あんな事のために体育館を占領されてんのがムカつくだけだ」

「そうか」

……これには俺もフォローのしようがないな。

俺はバスケは楽しくやるのが信条なので、今回の使用権の争いではどちらかというと女バスの味方をしている。

ここに夏陽を連れてきたのは偵察と、女バスのがんばっている姿を見せるのが目的だった。

特に後者を見せることで、温情を誘い、多少時間もらうくらいで良いんじゃない？　という流れに持って行きたかったのだが――完全に裏目に出た。
逆に夏陽を煽る結果となってしまった。
仕方ないか、今日なんかあいつら練習してねぇし。
俺もちょっぴりこいつら残念だなぁ、とか思ってたし。

「悠太」
「なんだ」
「走って帰るぞ」
「……あいよ」

女バスの皆さん。すまん。どうやら夏陽を怒らせてしまったみたいだ。
後は悪足掻きして男バスに自力で認められてくれ。

俺は……とりあえず今は夏陽のストレス発散に付き合うとするか。

これには俺も閉口せざるを得ない（後書き）

以上、現場からでした

うーん、うまくいかないもんだねぇ。（前書き）

落ち込むほどうまくまとまらなかった

……それはいつもか

てなわけで六話

うーん、うまくいかないもんだねぇ。

ハロハロ～、加納悠太でございま～す。

女バスの練習（してなかったけど）の偵察からまたも数日経ち、俺はバスケ部に正式に入部したわけであるが……

「……つまんねぇ」

無意識にそう独り言を言ってしまうくらい退屈してます。

「おい新人」

声をかけられた方向を向くと、そこにはイガグリ頭のチビが立っていた。ちなみに新人とは俺の事である。

「へいへい。なんでごぜぇましょう」
「そこがさっき滑った。お前今すぐモップかけてこい」
「自分でかけりゃぁ」
「いいから早くかけてこいよ、このデカブツ！」

そんな事を言われながら渋々モップがけを実行。
ほれみろ。これすごくね？　めっちゃピカピカしてやったぜ。

「邪魔だ。どけ新人」

労いの言葉すらなしか……

これだからゆとりは、って俺もゆとりか。

え？　何でこんな扱いうけてるかって？

理由は簡単だ。顧問と早速もめた。

掻い摘んで説明すると、入部したは良いものの俺は五年組にに配属された。まぁ実力も示してないし、それならしゃーないと思ってたんだが問題はメニューだよ。

全部フットワークってどういうことよ？　ボールすらいじらせないと？　んで俺は言った訳よ。頼むからボールをいじらせてくれって。

そしたらなんて言ったと思う？　素人に触らせるボールは無い。だってさ。

あのカマキリ（顧問）俺の事調査書だけで判断しやがった。

長野では俺は中高生と混じっていた為、小学校の部活には入っていなかった（そもそも人数が居なくて存在しなかった）のだ。だから調査書には何も書かれていない。

なので俺を素人と思ったのだろう。仕方ないことだとは思うけどな。

その後カマキリは俺に、暇ならモップでもかけてろと言われ、現在に至る。

小学生相手にここまでしなくてもよくないか？　俺じゃなかったら引きこもるぞこれ。

……おい夏陽、そんな目で見るなよ。泣きたくなるだろ。
後残りの薄ら笑いを浮かべている同級生諸君、帰り道には気をつけろよ。もしかしたらいきなりボコボコにされるかもしれないからなぁ。
……本気で苛ついつんな、俺。

「悠太、大丈夫か？」

夏陽がこちらに来て声をかけてくれた。こいつは本当に良い奴だと思う。
大丈夫か、というのもここまでに至る過程を含めての言葉だろう。

バスケしてるかどうか怪しい扱いだもんな。普通凹むだろう。精神年齢が大学生並みになっている俺ですら涙をこぼしそうになるくらい哀れな状況だ。

「ああ、大丈夫だ。ありがとな、夏陽」

「おう。ならいい、頑張れ」

そう言うと夏陽は俺のもとを去り、レギュラー組の居るところに帰っていった。

まったく、励まされてしまった。普段の学校生活では逆なのにな。

こういう時に気を回せるからこそ夏陽はキャプテン足り得るのだろう。

よし、なんか元気出た。心配させないようにがんばらなくちゃな！

「新人、ボーっとしてないで声出せよ！」

……頑張れるかなぁ？

うーん、うまくいかないもんだねぇ。（後書き）

イガグリ（おそらく永久に）終了のお知らせ

気に入らねぇな……（前書き）

キャラがわからない顧問

ごり押した悠太

ではどうぞ

気に入らねぇな……

「集合！」

本日の練習（といっても俺はモップをかけていただけなんだが、それはおいといて）がおわり、残すは顧問とのミーティングのみとなった。

五分もすると顧問が体育館に現れたので、夏陽が大きな声でチームメイトに呼びかける。

夏陽の号令と同時に五年生、もうクソガキでいいや、クソガキどもはすぐさまボールを片付け、集合場所まで駆けていった。

あいつら顧問の前だと動きが機敏になるな。普段からそれだけうごいてりゃあすぐ巧くなれるだろうに。

モップを片付け、向かう。

顧問を中心に半円が形成されている。前が六年生、後ろが以下下級生の二重円だ。

俺は夏陽の真後ろだ。狙ってやったわけじゃなく、行くとそこしか空いてなかった。

下級生よ。そんなに夏陽が恐いか。確かに口が悪かったりするが、良い奴なんだぞ。
キャプテンという役職上怒鳴ることが多いから親しくしにくいか。
まぁ、俺はそんな現状をありがたく思っているんだけどね。夏陽と話してる間はクソガキどもは口出してこないからな。

顧問はいすに腰掛けながらつらつらと喋っている。大半が六年に向けられたもので、五年組、下手したら枠外の俺には関係のない話なので聞き流してる。

「ああ、そうそう。今度の女バスとの試合だが――」

女バスと口走った瞬間、夏陽の肩がピクリと動いた。妙に気合いの入っている夏陽にとっては聞き逃せない話題なのだろう。
ほかの奴らは、ああそんなのあったねって顔をしてるが。

「五年のチームを出す。五年、そのつもりでいろ」

「なっ、監督！」

顧問の発言に夏陽は叫ぶように口を挟んだ。

「なんだ？　竹中」

「監督、どうして五年を出すなんて言うんですか。試合には俺たち六年が出るんじゃなかったんですか！」

「六年がわざわざ出るまでもない。女バスには五年で十分だ。あんなお遊戯にお前らは付き合わなくていい」

顧問が素っ気なく、そう答えた。前半は同意するがね。もしあのままの女バスだったら五年が相手をしても十分に勝てる。

あのまま、だったらだが。

どうも胸の奥がすっきりとしない。実力では圧倒的に男バスの方が上なのに、奇妙なしこりが残る。
もしかしたら、と思わせる嫌な違和感。
それを夏陽も感じ取っているのだろう。だからこそ、反発している。
そういう事を含めて、後半のお遊戯という評価には同意できないな。

「監督、お願いします！　大事な試合なんです。自分たちで勝って、練習時間をてにいれたいんです。お願いします！」

勢い良く頭を下げる夏陽。顧問も渋い顔している。

「……わかった」

「っ、ありがとうございます！」

「――ただし、こちらのハンデとしてそこの加納を入れる」

「……はい？」

今度は俺が驚く番だった。

「どうした加納？　返事をしろ」

「小笠原顧問、お言葉ですが俺はその試合に出たくありません」

――ビキッ

と、２つ音がした。一つは空気が固まった音。もう一つは顧問に青筋がたった音だ。

夏陽が振り返ってギョッとしているが、今は無視。

「ほぅ、何故だ。言ってご覧なさい」

低い、威圧する声色で言う。

「はい。俺は女バスが嫌いじゃ無いので無くなってほしくありません。なので試合にでる理由がありません」

「自らアピールのチャンスを捨てるのですか？　理由が無い、という言い訳で」

「はい。捨てます。動機は十分です」

「……」

「……」

「明日からお前はロードワークだけだ。試合当日も端でシャトルランをしてろ。わかったな」

制裁、ケジメ、腹癒せ、様々な意味を内包した宣告を――

「はい。わかりました」

甘んじて受け止めた。

「話は以上だ、竹中」

「あっ、気をつけ、礼」

『ありがとうございました！』

「悠太」

解散後の後片付けをすまし、シューズの紐をといていたら夏陽が現れた。
おおかた、さっきのやり取りについてだろう。

「試合、出ないのか？」

「ああ、さっき言ったとおりだ。敵対する理由がない。中途半端なまま出たって楽しくなさそうだしな」

「……そっか」

「怒らないのか？」

「なんでおこんなきゃなんねぇんだよ。俺は悠太がこの問題について快く思ってない事を知ってるからな。残念ではあるけど、本気の悠太とプレーできないんじゃあ意味がないし、なにより面白くないだろ。だから今回は諦めるさ。チャンスならまだいくらでもある」

ガシガシと頭を掻きながら、少し照れくさそうな顔をしてそういっ

た。
まったく、こいつは……。

「夏陽」

「なんだ」

「ありがとな」

「……おう」

良い奴すぎるぞ、バカやろう。

気に入らねぇな……（後書き）

≪注意≫
この作品には夏陽√はそんざいしません。

えー、突然ですがヒロインアンケートを実施したいと思います。
以下の内からお選びください。

≪候補≫

・湊　智花
・三沢　真帆
・永塚　紗季
・香椎　愛莉
・袴田　ひなた

・篁　美星（↑無理をすれば何とかなる？　かもしれない√）

・ハーレム及び友情√

※一人二票までとさせていただきます。同じキャラに二票、というのも可能です。

※期間は１３日まで（１４日はアウト）。

※女バスＶＳ男バス終了までは共通の√です。反映はそれ以降となります。

とりあえず以上となります。何か不備がございましたら、指摘してください。

ご協力よろしくお願いします！

汐美　潮

野生の、合法ロリが、現れた。（前書き）

あの人と絡みます

どうぞ

野生の、合法ロリが、現れた。

――タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、タッ、

時刻は午後5時を回り、約二時間前の騒がしさが嘘のように静まりかえっている校舎の間を一定の速度で駆け抜ける。

滴り落ちる汗を袖で拭う。
時々視界に入る他の部活動や校舎の脇にある花壇に目を向けながら、飽きることなく走り続ける。

どうも、そういうわけでランニングをしている加納悠太です。
気まぐれで若干センチメンタル（？）に解説してみたが、どうもだめだな。向いてない。そういえば先輩たちにもお前は情緒がないって言われたっけ。

はて、あの時はなんで言われたんだっけか？
……ああそうだ、せっかく伝統的なの日本家屋に住んでたのに、部屋閉め切ってクーラーつけて夏を過ごしてたんだった。

本当にあの時は大変だった。

先輩が暴走して
「ヘイ！　情緒一丁！」
とか言いながら家にネズミ花火投げ込んできたんだった。

後でボコボコにしてやったがな。

先輩だろうと何だろうと関係ねぇ。張り直した障子は破れたし畳が燃えて小火騒ぎおきたし。それ考えればそれくらいで済んで良かったと先輩は思うべきだろうよ。

ふぅ、さて長々思考に耽っていたが、なんで走りながらこんな事考えているかというと――

「ほっ、ほっ、ほっ、ほっ、」

……言っておくがこれは俺のものではない。
そう。そうなんだよ聞いてくれよ。丁度五分前位からだったかな、
なんと、

ジャケット羽織った黒髪ロングのちっこい女の子がついてきます。

……おいなんだその目は。止めろよ。おかしくなんてなってねぇから。

あん？　お前、疲れてるだろうって？　そりゃあ疲れてるが幻覚見るほどじゃねぇよ。

は？　お前、憑かれてるだろうって？　いやいやそんなわけ……あるかもしれねぇな。最近の境遇考えるとなんか納得出来ちまうな。神社でお祓いでもしてもらうかね？

しかし、……埒があかねえな。
とりあえず、人気のないとこいって、

「何か用ですか？」

話しかけてみることにした。人気のないとこ入ったのはあれだ、もし本職の方だったら俺はイタい奴になっちまうだろ？　だからだよ。

「にゃはは、ばれたか」

その少女は舌をペロリと出しながら言った。ドコからか「てへっ」という声が聞こえた気がした。
つっこまねぇぞ、その笑い方と問いには。

「何か、用ですか？」

「あれ？　もしかして怒った？」

すまんすまん、と少女は続ける。そして軽く咳払いした後、

「はじめまして、だね。私は篁（たかむら）美星（みほし）。女子バスケットボール部の顧問だよ」

そう、のたまった。
俺が瞠目したのも無理はないだろう。この少女、じゃなくて女性の容姿は社会人と言うよりは学生に近い。あの高校生コーチと同級生といっても十分に通じそうなものだった。
年を水増ししているようにしか思えない。

「……どうも、加納悠太です。転……校生です」

一応、返しておいた。間が空いちまったのは思わず転生者って言っちまいそうになったからだ。何故だかは知らん。

それにしてもこの人が女バスの顧問か。
……うちの顧問と本当に馬が合わなそうだな。

「へー、やっぱりか。ところで悠太、こんなとこでなにやってんの？」

その名で呼ぶな！　その名で呼んで良いのは竹中夏陽だけだ！

言わないし、冗談だけどな。後やっぱりってなんだ。てか一気に砕けたな。

「ロードワークですよ。見ての通りね」

「何でお前だけ？」

「顧問（カマキリ）ともめたからだ」

何で俺はベラベラ喋ってんのかね？　まあ、いいか。

「にゃはは！　そうかそうかあいつとね。お前早々にやらかしたな」

篁先生は腹を抱えて、体をくの字のようにして笑う。

「で？　それまたなんでよ？」

「……女バスとの試合にでるのを拒否したからだ。」

篁先生の顔から笑みが消える。

「へぇ、どうして？」

先程と対極の冷たく心臓にからみつくような声だ。一瞬ビビった。

「意味がねぇからな」

「それは出る価値もないって事？」

「あ～、言い方間違えたな。出る理由がない」

「理由？」

「おう、俺は元から女バスを敵対視してないからな、てかむしろ女バスの活動方針の方が俺の信条に近いからどっちかっていうと俺は女バスの味方だな。まぁけどだからって男バスと敵対してるわけじゃないからな。あんまり癪に障るようならそれも辞さないが、……それやると夏陽が大変そうだし。今回の件に関しては俺は中立であ

りたいと思ってる。てかせざるを得ない。長くなったがこれが言い訳だ。どうだ？　納得したか？」

……俺本当になんで喋ってんだ？　初対面の奴に語ることでもねぇのに。

謎だ。

「にゃはは！　にゃはは！　にゃーはっはっ！」

うおっ！

いきなり高笑いし始めやかがった！　怖っ！

あん？　何で俺の方にくんだ――

「ぐえっ、かっ、てめぇ……なにしやがる」

近づいたかと思えばよくわからねぇ技で首締めて来やがった！
チィッ！　っヤバい、当たる！　かおに胸が当たっ――てないな。
んだよ期待させやがって。この上なく残ね――ぐえっ、締めつける
強くしやがった！

「悠太、お前ホント面白いよ！　お前の爪の垢を煎じて甥に呑ませ
たいくらいだ。よし決めた。お前、男バス居辛くなったら女バス来
い、いいな、決定な」

甥って誰だよ。というかなんだよその決定は。

「男に女バス入れってか」

「んなもんどーにでもなんだろ。気にすんなよ。男だろ？」

気にしろよ、教師。後男関係ないから。てかお前は自分の発育きに
しろ。ペチャパイ。

「ごふっ！」

蹴りくれやがった。イテェ……。

「おっ。もうこんな時間か。じゃあな悠太。いつでも来いよ～」

そういうと篁（合法ロリ）は走り去っていった。結局あいつ何がしたかったんだ？　走って笑って俺をボコって去ったわけだが。
自然災害並に理不尽じゃねぇか。……やめよう、ああいう輩はそういうもんだと理解した方がいい。

……走ろ。

野生の、合法ロリが、現れた。（後書き）

キャラあってるかな？

淡白な文章しか出来ねえ。残念だ。もっと深く表現したいのに。

VS女バス　俺なにもしてねぇな……

こんにちは。加納悠太だ。

篁（たかむら）　美星（みほし）の襲来（校舎裏の花壇の脇事件と命名）から約一週間たった。正直、あれほどやっちまったなあ、と後悔している出来事は少ない。アイツのお陰でこの一週間は大変だったの一言につきる。

俺の何を気に入ったのか知らねぇが毎日学校で絡んで来やがった。昼休みには教室を襲撃し、授業では俺のこと指しまくるし、部活ではロードワークの合間に現れ二三言喋るなり帰って行く。

……お前仕事どうしたんだよ。てか昼休みに教室に来るなよ。周りの奴も何で平然としてんだよ。誰か止めろよ。寝られねぇだろ、俺が。

これは後から聞いた話だが、アイツは以前からあんな感じで偶に襲撃してきていたらしい。だからって馴染みすぎだろ。

そんなわけで俺は転校してからしばらく無かった≪落ち着かない日々≫を過ごした。まあ長野には先輩というもっと厄介な奴がいたからまだ平気だが。

そうそう、この二〜三日前にアイツが自分のことを先生つけずに自由に呼んで良いとか言い出したから、試しに

「みほりん」

て呼んだらギタギタにされた。何だったんだよあれ。理不尽だろ。ちなみに皇(すめらぎ)も嫌らしい。似てるもんな皇と篁(たかむら)。苦い思い出でもあるのかね？

結論を言うと美星と呼ぶことになった。これもどうよ？　とか思ったが半ば話題が泥沼にハマっていたのでこれで無理矢理落ち着けた。

でも流石に馴れ馴れしすぎるのではないか？　と訊いたところ

——悠太は同年代みたく感じるから敬語使われると逆に気持ちワルい——

だってさ。アイツすごくね？　本能的に俺の本質感じ取ってるぞ。俺、年相応を心掛けて行動してるよな？　女の勘って怖い。

……美星という謎生物について語ってしまった。どうでも良い話題だったな。

さて、本日は例の運命の日であるわけですよ。

そう、男バス対女バスの試合でございます。

改めて女バスを見ると、凄く色物だらけの集団だと思った。

まずは、エースの湊（みなと）　智花（ともか）。
ジャンプシュートの完成度が半端じゃない。それに多少離れていても平然と決めている。普通日本の女子バスケは両手（ボスハンド）でうつのにな。
さっき見たとき絶句した。

次に三沢（みさわ）　真帆（まほ）。
右斜め四十五度からバカスカシュートをきめているのも驚きだが、それ以上に運動量がすごい。アップから今まで殆ど足を止めてないし、動きも時間が経つにつれて良くなってる。
最高潮を迎える試合中はどれほど走り回るのかと楽しみになってくる動きだ。

次、アイガード（名前を知らない）。
こちらは三沢とは対照にあまり動いていない。温存しているような印象を受ける。三沢と反対の左斜め四十五度からうってバカスカ決めてる。アイガード、お前もか。

あれ？　そういえば夏陽が言ってたひなたってどれだ？

湊と三沢はわかってるから名前わからねえ奴のどれかなんだけど……

まあいいか。とりあえずアイガードが≪ひなた≫候補壱。

香椎（かしい）　なんとか。

ゴール下でシュートを決めている。俺が言うのもなんだが、反則的な身長だな。存在感が違う。

男バスで香椎を完全に止められる奴は少ないだろう。頭の上からうたれちゃあ、ねぇ。だれがマークに付くんだろう？

香椎は≪ひなた≫候補弐だな。

最後に……なんだあれ？

フランス人形さん（仮）

練習して……いや、あれは戯れてるって言った方がいいかもしれない。

妙に画になっている。

≪ひなた≫候補参だ。

これと男バスは試合すんのか。すこぶる厄介そうなんだが。でももしかするともしかするんじゃないか？　良くも悪くも男バスは平凡だから、色物に弱いという弱点、というか苦手意識みたいのがある。この試合案外面白くなりそうだ。

ベンチで男バスのみんなとミーティングしている夏陽を見ると、気合いの入っていない奴に激をとばし、志気を高めている。

俺はそれに混ざってない。何故かって？　端っこでシャトルランしてるからな。かれこれ三十分近く走りっぱなしで汗ダラダラだ。

おいおい、同情なんかすんなよ。よけい虚しくなるから。

あ、始まるみたいだ。……うん、両方がんばってほしい。

さあ、俺も気合いの入れて走るぞ！

VS女バス　俺なにもしてねぇな……（後書き）

悠太が暴れるまであと４話くらい、かな？

VS女バス　出番なしかよ……（前書き）

次回に繋げる為の回。

VS女バス　出番なしかよ……

体育館は異様な雰囲気に包まれている。それは普段交わらないもの同士の戦いが始まろうとしているからだ。

相容れない者同士の戦いを前に、コートだけが体育館から独立したような、そんな雰囲気。

幾重にも重なるボールの音は不協和音をおこし、一層それを歪ませている。

コートの中には二つのチームがある。

一つはユニフォームを身に付けた男子バスケットボール部。

もう一つは体育着にゼッケンを貼り付けた女子バスケットボール部だ。

女子の方はいわずもがな、目の奥に静かに、されど激しく闘志の炎を燃やしながら直前の練習に取り組んでいる。

男子の方は竹中夏陽を除けば、どこか面倒そうに練習している。

対照的な二つだが、本来の実力差を考えれば男子の態度も理解できるだろう。

そんな二つのチームを見守る人物の中に長谷川（はせがわ）　昴（すばる）が居る。

彼は女子バスケットボール部のコーチであり、この試合に闘志を燃やす者の一人だ。そして、数少ない女子バスケットボール部の勝利を確信している者の一人である。

しかしその確信はある一つの懸念事項によって僅かではあるが、揺らいでしまっている。

「ミホ姉、訊きたいことがある」

「あん？　どーした？」

「あの子の事知ってる？」

昴がそう言って指差した先には、黒いウェアに紅いバスケットシューズを履いた、背の高い少年がいた。

「あー、悠太の事？」

ミホ姉こと、篁（たかむら）　美星（みほし）は応えた。

「ああ、あの子の事を教えてくれ」

「最近転校してきた男バスの新人だよ。六年生。でも安心しろ。悠太は絶対にこの試合にでない」

美星の言葉に昴は首を傾げる。

「どうして？」

「本人が出たくない上にカマキリ（男バス顧問）と悶着起こしてるからだ。悠太は女バス寄りのスタンスだから最初（はな）から馬があわないらしい」

「へー、根性あるな」

「まっ、兎に角悠太の事は気にしなくて良い。お前はあの子らの事だけ考えとけ」

「……了解」

昴の胸に一つの残る懸念を無理矢理頭の隅に追いやった。

十分後、女バスの命運を賭けた試合が始まった。

VS女バス　出番なしかよ……（後書き）

内容が薄い。けど必要な回だと信じたい。

アンケートも今日迄ですので、まだの方はお早めに。

男バスVS女バス　まだかっ、まだなのか俺はっ！（前書き）

相変わらず量が少ない。

バスケシーンを書くのは予想以上に難しい。

蒼山ザクさんマジすげー。

男バスVS女バス　まだかっ、まだなのか俺はっ！

両方のチームの出場メンバーがセンターサークルに集まる。

挨拶を交わし、ジャンプボールが行われる。ジャンパーは男子が竹中夏陽、女子が湊智花だ。

ボールがなげられる。制したのは羽が生えたように高々と跳んで見せた智花だ。弾かれたボールは三沢真帆の手中に収まる。

「おっしゃ、もらいっ！」

「真帆っ！」

「あいよっ！」

真帆から智花へとパスが出され、智花はハイポストまで駆ける。

「（速攻なんて決めさせねえっ！）」

夏陽は智花の正面に回り込み、ディフェンスの姿勢をとる。智花は

そこで止められる。

「おねがいっ！」

――フワリと、

緩いパスがローポストに出される。

「なっ！」

声を上げたのは夏陽。夏陽は智花が抜きにくると思っていたので、パスの警戒を怠っていたのだ。

ボールはセンターの（本人はスモールフォワードだと思っている）香椎愛莉に渡った。

「はいっ！」

愛莉はそれを丁寧に、圧倒的な高さをもって、ゴールに収めた。

――歓喜。

女バスのメンバーは愛莉を褒め称え、ディフェンスに廻る。

一方、男子の方には動揺が走っていた。彼らは先程見た女バスの実力の片鱗に衝撃を受けたからだ。
開始十秒で点を取られることなど、地区で強豪の部類に入っている男バスにとって滅多に起こり得ることでは無かったのだ。

「タケっ！　右！　来てるぞ！」
「――あっ！」

夏陽の手からボールが無くなる。智花にスティールを喰らったからだ。

再び智花から愛莉へとボールがわたるが、愛莉がこれを外し、男バスがリバウンドを制した。

「四番、ＯＫ」
「――湊っ！」

智花が夏陽にマンツーマンディフェンスをする。

「……な、なんだこのフォーメーションは？　……ゾーン、なのか？」

カマキリがそう漏らすのも無理はない。女バスが行っているゾーンディフェンスは存在し得ない奇妙なモノだからだ。あえて形容し、名付けるならこう言うだろう。

――ゾーンディフェンス≪ファンネル・ワン≫――

「やばっ、くそ！」

ホイッスルが鳴る。夏陽が焦って智花にファールをしてしまったのだ。

ボールは女バスに渡り、そこから愛莉にパス、そして二本目のシュートが決まる。

「（クソッ、クソクソクソクソ！）」

夏陽は不甲斐なさと歯がゆさで一杯になっていた。

しかし何時もならここで冷静になることが出来る夏陽だが、今日は

何時もと違っていた。

視界の端にみえる悠太の存在だ。

夏陽は悠太に情けない姿を見せたくない余りに、泥沼にはまっていくことになる。

女バスは絶好調。男バスは空回りしたまま試合は流れていく。そして女バスが優勢のまま終わるかと思っていた前半終了間際、

――それはおこった。

男バスVS女バス　まだかっ、まだなのか俺はっ！（後書き）

アンケートは活動報告で。

悠太の活躍まであと二話。かな？

覚悟はよろしいか？（前書き）

急だし、無理あるかも。

後書きあります。

覚悟はよろしいか？

どうも、加納悠太だ。

試合が始まったので俺は走るのを中断して見学している。カマキリの野郎は試合に集中しているのでサボっていてもバレやしない。ありがたい。いい加減疲れていたし、飽きてたからな。

それにしても、女バスの奴らは凄いと思うよ。この短い期間でよく仕上がってる。もう素人とは呼べないな。間違いなくあの高校生コーチの御陰だろう。何をしたのか知らないが見事だ。俺じゃあできねえな。まず教えられないし。

何にせよ、男バスさんよ。少しやられすぎじゃないかね？　一回タイムアウトとるなりして落ち着いたらどうだ。夏陽を筆頭に力み過ぎだ。空回りも良いとこだろ。

カマキリなんで何もしねえの？　交代は駄目でも色々やれるだろ。夏陽は湊に拘りすぎだ。個人技は止めようと頑張ってるけどパスコースを塞いだ方がいいと思うぞ。抜かれても誰かがカバーにはいるだろうし。

……あ、決められた。アイガードも上手いな。でもなんでさっきから左側にしか行かねえの？　あれじゃあディフェンスされ易い、っ

てあれ？　おかしくないか？　なんで三沢は三沢で左のフリーの時は打たないんだ？　あんだけ右で入れて……おい、まさか右だけか（・・・・）？

……おいおい、当たってるのか？　アイガードも左からしか打ってねえし。

……まあ、かんがえてみりゃ当たり前なのか。入るようになったのだって奇跡だ。それに湊が動いてるからそれなりに躍動感が出てるな。

これでよく誤魔化せるな。……ああ、男バスが舞い上がってるからバレないのか。

そんなのありかよ……。

後一分で前半も終了か。女バスは今の内に突き放しておきたいな。後半は地力差で今までのようにはいかなくなるだろうからな。

？　あん？　なんかフランス人形さんがおかしくないか？　頭が揺れてるぞ。

フラフラ～ポテッ

って、しりもち付いちまったよ。審判はタイムをとったな。皆プレーを中断してゾロゾロとフランス人形さんの周りに集まってる。俺

も行くか。

「ひなたちゃん！　大丈夫！？」

高校生コーチが声をかける。他の女バスのメンバーもそれぞれ声をかけていた。

夏陽も大丈夫か？　顔が青いぞ？

てか、フランス人形さんがひなただったのか。アイガードに香椎、なんかすまん。

「おー？　なんかひなくらくらする」

「貧血、いや脱水症状か？　……とにかくひなたちゃんはこれ以上出来ないな。」

高校生コーチが悔しそうに唇を噛んでいた。交代は……無理だ、いねえし。美星の奴は変態養護教諭に伝えに行ったみたいでこの場に居ない。

「ひなたちゃん！」

変態登場。しかし今はまじめモードみたいで顔に一切のおふざけは見られない。

「さあ、保健室に行くわよ。私の背中に乗って」
高校生コーチはひなたを養護教諭の背中に乗せた。

「頼んだよ」

「ええ」

いつの間にか戻っていた美星が声をかけ、養護教諭は頷きながら返事をすると、体育館を去った。

「で？　そっちはどうするんだ」

カマキリが高校生コーチに問いかける。おい、重苦しい雰囲気がさらに増したぞ。

「……そちらの選手を貸してはもらえませんか？」

頭を下げ、高校生コーチは請うように言う。

「ダメだ」

しかし、カマキリはその願いをバッサリと切り捨てた。

「そこをなんとか！」

「ダメだ」

同じように断る。……貸してやってもいいんじゃねえか？　そう頑なになる事でもあるまいに。

「何故男バスから選手を出さなければならないのですか。あなたたちは今回のような事も承知で来たのでしょう？　だったらこのような幕引きになっても仕方がないでしょう」

「……」

正論だな。その通りだよ。女バスはこうなった以上どうにもならない。まあしかし、俺は納得出来ないな。

「顧問」

「……なんだ、加納」

そう不機嫌そうにすんなよ。

「自分が女バス側に入ってもよろしいですか？」

「ダメだ」

即答かよ。少しは考えてもいいんじゃねえのか。

「何故」

「あなたのような素人であろうと男バスに所属している以上、あなたが敵対する事は許しません。」

「……そうですか」

「別に問題ないでしょう。どちらにしろ後半になれば男バスが勝っていたでしょうしそれに――」

――おふざけ集団が消えるのは、良いことでしょう。

……気に入らない。

……ああ、気に入らない。

……本当に、

「気に入らねえな」

「……はい？」

聞こえなかったのか？

「気に入らねえって言ったんだよ。人の話はちゃんと聞け」

「なっ、あなたねぇ！」

「顧問、俺バスケ部やめますわ。今すぐに。いいですよね。ご心配なく、届けは後で出します」

青筋たてながらギャーギャー騒ぐカマキリを放っておいて、俺は美星の元に歩いていく。

「篁先生」

俺は美星に頭を下げた。

「俺を――慧心女子バスケットボール部に入れてください」

周りがシンッと静まり返る。顔を見なくても分かる。皆唖然としているのだろう。

「――いいよ、入れ。」

珍しく静かな声で美星はそう言った。

「じゃあそういうわけだから、悠太もらってくね小笠原先生」

「くっ、す、好きにしなさい！」

カマキリは顔を真っ赤にして憤りながら言った。

「じゃあ試合を再開しましょうか。文句ないよね。悠太はもう女バスなんだから」

「……いいでしょう。結果は変わりませんから」

カマキリはそう言うとベンチに戻っていった。流石は美星。理不尽の権化。合法ロリは伊達じゃない。ごり押しだよ。俺も人のこと言えないけどさ。

「サンキュー、美星」

「気にすんな、もとから私が誘ってただろ。」

「……そうだな。それでも、な」

「にゃふふ、はいはい。悠太、……暴れてきな」

「おう、勿論だ」

本当にありがたい。後で缶コーヒーでも買ってやろう。金があれば飯でも奢りたいが俺小学生だからなあ。

まあ今は置いておこう。

さて、夏陽には申し訳ないが本気でやらせてもらおう。

――覚悟はよろしいか？

覚悟はよろしいか？（後書き）

悠太のバスケシーンが上手く書けないので一日空くかもしれません。
お許しください。

VS男バス　前半戦・秒の攻防（前書き）

遅れました。

相変わらず短い

どうぞ

VS男バス　前半戦・秒の攻防

――キュッ

バスケットシューズ（通称：バッシュ）のスキール音が鳴る。音源は加納悠太の紅いバッシュだ。先程自前の雑巾で底を拭いて埃を取り、滑らないようにしていたので、今はその具合を確かめているのであろう。一度強くコートに足の裏をこすりつけた。具合は良好。強烈な摩擦力でバッシュはぴたりと止まった。

悠太は女バスの面々と軽く挨拶をした。細かい、詳しい事は試合の後と言うことにして、名前を覚える程度のものだった。

悠太は黒いウェアの上に黄色のビブスを着ている。下から紅、黒、黄色の組み合わせは彼の体格も相まっておかしいくらいに目立っていた。

「長谷川さん」

再開の直前、悠太はコーチ兼監督である長谷川（はせがわ）　昴（すばる）に声をかけた。

「どうした？　え～、加納君」

「俺のポジションはどうしましょうか？」

「あ、そうだな。じゃあポジションはスモールフォワードをやってくれ。ディフェンスはゴール下の三角の頂点てお願い」

「あい、了解です」

「そうだ、二ついいかな。ポジションの名前は口に出さないで。後智花にポジションをポイントガードに変わるよう言ってくれ」

一つ目の注文に首を捻る悠太だが「はい」と答えた。

やり取りを終えた悠太は昴のもとを離れ、智花のもとへ。

「湊」

「うわっ、……なんだ加納君か。ビックリした」

智花が小さな肩を跳ね上がらせる程驚いたことに悠太は俺はそんなに怖いか、と若干へコんだ。悠太は気を取り直して話しかける。

「コーチから伝言。ポジションをポイントガードに変更だってさ」

「長谷川さんから……うん、わかった。驚いちゃってゴメンね。」

「ん、きにすんな」

悠太は右手を軽く振ってアピールする。男バスのメンツがコートに入り散らばる。女（＋悠太）バスも中に入って独特のゾーンを作る。前半は残り３８秒。男バスのボールから始まる。

「怒ってるか？」

悠太は夏陽に問いかける。夏陽は眉を寄せて、

「怒ってる」

と短く答えた。でも、と続ける。

「こんなに早く悠太と対決出来る事を俺は嬉しく思う」

その言葉に悠太は薄く笑う。大きな変化はみられなかったが、安堵しているように夏陽は見えた。

「ああ、俺もだ」

悠太は頷いた。

――だから

「「この試合は絶対に勝つ」」

二人はコート上で別れていった。

ボールがコート上に放たれる。それを運ぶのは夏陽。マークするのは智花だ。夏陽は自身の左にパスを出し、受け取った男バス選手は４５度の角度からシュートを放つ。が、ボールはリングに弾かれ高々と舞う。

「リバウンド！」

誰かが叫ぶ。男バス選手はすぐさま女バス選手を抑え、場所を奪う。しかし、

「なっ！」

制したのは女バス側の選手。悠太だ。悠太は男バス選手二人に対してフィジカルを生かし抑えつけ、ゴールより高い位置でボールを取った。

「湊っ」

悠太は智花にパスを出す。受け取った智花は高速のドライブでコートを駆け、レイアップシュートを打った。放たれたボールはクルクルとリングの上を回る。皆固唾をのんでそれを見守る中一人行動している奴がいた。悠太だ。悠太はゴール下まで走り、跳んでいた。

（軽くだ。軽く、そっと触れるだけっ！）

悠太はそんな事を考えながら手を伸ばす。往生際悪く回っていたボールは悠太の指先に触れ、内側に吸い込まれていった。

ビーーーー！

ブザーが鳴り響き、前半終了を告げる。しかし誰も行動を起こそうとしなかった。目の前で起こったＮＢＡさながらのプレーに皆釘付けになっていたのだ。そんな中悠太は軽快な様子でベンチに帰って行く。

悠太は夏陽をすれ違う時に一瞥し、何も言わずに通り過ぎていった。

夏陽は堅く拳を握りながらも、その顔はあふれる闘志を発しながら、小さく笑っていた。

VS男バス　前半戦・秒の攻防（後書き）

勝手ではありますが、ここから不定期になると思います。
ご了承ください。

お前ら……俺を休ませろ。（前書き）

お久しぶりです。

勉強が行き詰まったから書きました。

文章が変だけどまぁいいや。

趣味の一環だからね。

感想をくれた皆様ありがとうございます。

一人一人に返す時間がないのでこの場で感謝を申し上げます。

では、みじかいですが、どうぞ。

お前ら……俺を休ませろ。

ベンチに戻りながら、深く息を吸い、ゆっくりと吐き出す。悠太は内心落ち着かなかった。それも当然だろう。これは悠太にとっても初めての試合なのだから。

悠太は同年代相手にバスケをしたことはほとんどない。そこには馴れない相手に対する不安があった。そして、もちろん技術面も不安があった。いくら練習を重ねた悠太といっても、比較対象が居ない状況では自信を持つことは出来ない。長野には先輩がいたが、あれは除く。あれは色物過ぎて、そもそも比べ物にならないことが悠太には分かっていたからだ。それに、悠太は自身も認めている致命的な弱点がある。それがバレるのではないかという心配もあって、試合の最中は気が気でなかった。　もう一度深呼吸。吐く息とともに思考の淀みが消えていくような気がした。

今考えても仕方のないことだと無理やり思考を止める。濁りをつくるときではない。

兎に角、今は全力を尽くす。女バスの命運がかかってる試合だ。油断も慢心もせず、夏陽を、男バスを潰す。

そう決意した矢先、衝撃が悠太の背中を襲った。

「どーん！」

「グオッ！？」

予期しなかった出来事に、悠太は動揺しながらも倒れかけの体勢でなんとか踏ん張る。何事か、と振り向いてみるとソコには三沢真帆がいた。真帆は悠太の首に腕を回し、背中に乗っている。所謂『おんぶ』をしている状態であった。

「なにしてんだ？」

ため息を堪(こら)えながら悠太は真帆に訊いた。堪えたのは悠太が女バスのメンツに疲れを悟られたくなかったから。試合前に走り込んでいた悠太としては早くベンチで休みたかった。だが、それを露骨に出すと士気に関わる恐れがある。ましてや、悠太も男であるので、女の子が頑張っている脇で自分はだらけるなんて真似はしたくなかったのだ。

しかし、気がゆるんでいた所為か、悠太の声色には若干疲労の色が表れてしまっていた。

「ユー君すげーな！　走って跳んでシュート入れて大活躍じゃん！　しかもメチャクチャ高かったし！」

真帆は矢継ぎ早にそう言った。真帆の目はキラキラと輝いている。生で見るダイナミックなプレーに興奮しているようだ。その目はヒーローに憧れる少年のようである。ところで、

「ユー君ってなんだよ？」

「悠太のことにきまってんだろ。嫌だったか？」

「嫌じゃないけど、ほかにねぇの？」

「ほか？　んー、ユッティーと迷ったんだけど……」

「よし、ユー君でかまわない。だから其れだけは止めろ」

ユッティーは駄目な気がした悠太であった。とにかく、

「あー、わかった。わかったから降りてくれ。話は聞くから」

素っ気なくそれに返す悠太。カタカタと膝がふるえ出しているところを見るに、本当にキツくなってきたようだ。

「おー、まほずるい。ひなもやるー」

無邪気な声が背後から聞こえた。しゃべり方からして声の主は袴田　ひなたであるだろうと、悠太は推測する。裕太は始めは言葉の意味がわからないでいたが、意味を理解したとたん顔を少し青くする。

「おい、袴田。頼むから――」

「どーん」

――跳び乗らないでくれ。その言葉は無情に間に合わず、さらなる衝撃が悠太を襲った。

「ぐっ、ごごご」

絞り出される声。二人を支えようとするも叶わず、

「「「うわっ！」」」

三人はその場に崩れ落ちた。乗っていた2人が怪我をしなかったのは、悠太が最後まで力を緩めなかったからだろう。

比較的低速で前に倒れ込んでいた。

「はぁ……」

悠太は思わずため息を吐いた。

お前ら……俺を休ませろ。（後書き）

受験生が何をしているんだろ……。

智花と悠太　《小さなエースと孤高なチート》（前書き）

けっこー頑張ったよ。

智花と悠太　《小さなエースと孤高なチート》

「にゃははは！　すげーじゃんみんな！　いける、絶対勝てるって！」

「おうよ！　あたしの天才的なシュートでどんどん差広げちゃうぜっ！」

「言ってろー。絶対私の方がいっぱい決めてやる」

ハーフタイム。現在選手たちは各々、疲れをいやしている。美星、真帆、紗季が談笑しているのを横目に見ながら悠太はパイプ椅子に深く腰掛け身体を休めていた。

タオルで滴り落ちる汗を拭いながら、スポーツドリンクを口に含んではゆっくり少しずつ飲み込んでいく。

無心でその行為を繰り返していると、悠太の目の前に誰かが現れた。伏せていた顔を上げてみると其処には女バスのエース湊　智花が立っていた。その表情はうっすらと困惑を含んだものだ。

「……どうした？」

悠太がそう訊くと、智花は顔を強ばらせながら言葉を発した。

「と、隣に私のタオルと飲み物があるんだけど、と、取って良いかな？」

視線を向けると確かにドリンクの容器と桃色のタオルが置いてあった。何故俺に訊く、とか悠太は思ったが口に出さないようにした。

「どうぞ」

「あ……ありがとう」

智花はタオルを基準にして、悠太とは反対側に座る。しかし座ったは良いものの、ちっとも落ち着いていない。せわしなく、悠太を見ては逸らす。そんな事をしていた。

「……気になんだけど」

「え、あ、……ごめんなさい」

シュンとしぼんでしまう智花。それを見て悠太は迂闊にも低い声で呟いてしまったことを悔やんだ。……これでは自分がいじめているみたいではないか。

案の定、美星にはそう捉えられていたみたいで、会話を続けながらも悠太の方をうかがっていた。

「あー、あのさ。怒ってるわけじゃないからな。声の低さとかはもとからだから」

悠太が言い訳するが、

「う、うん……ごめんなさい」

逆効果かもしれなかった。さらに小さくなってしまった。美星からの視線が徐々に強くなってくる。俺のせいじゃないだろ、と言わんばかりに悠太は肩をすくめてみせたが、視線は何とかしろと語りかけてくる。
何もさせてくれないんだけど……、と内心で呟きながら苦笑いで返した。

「――あの」

高く小さな声が、悠太の横で響いた。まさか話しかけられると思わなかったので悠太は目を見開いたがすぐに、なんだ、と返答する。
黙ってしまうとまた距離が開いてしまうと思ったからだ。

「湊　智花です。よろしくお願いします」

「あ、ああ。加納　悠太だ。よろしく」

挨拶なら既に済ましただろ、と言うのは野暮だろう。

「加納君はさ、どうしてあんな事したの？」

智花は神妙な表情で質問した。

「あんな事……ああ、女バスに寝返ったことか？」

コクリと智花は頷いた。確かに不思議だったのかもしれない。女バスに寝返るメリットはほとんどないのだから。

「なに、……状況が気にくわなかった。ただそれだけだ」

「……それだけ？」

キョトン。そんな言葉がよく当てはまる顔をした。

「まあ、もっと細かく言うと男バスでの俺の扱いだとか、夏陽と試合がしたいだとか個人的なことがいっぱいある。勿論、女バスがこのまま無くなっちまうことに異議があったってのが主な理由だけどな。そういうのも色々ひっくるめて『気に食わねえから変えてやろう』って気になったわけさ」

「へー、でも何で女バスが無くなるのが嫌だったの？」

悠太は少し考えてから言った。

「バスケは上手い下手でやるべき人を選ぶスポーツじゃないからだ。男バスは上手いから残って、女バスは下手だから消える。そんなのってねぇだろ。諦めもつかねえよ。下手な奴らはバスケやっちゃいけねぇのかって話だ。バスケは、下手クソな奴だって楽しいと思える素晴らしいスポーツだ。……それに触れて、抱きしめようとしている奴らから奪う資格なんて誰も持ってねえ。俺は手放したくないと思ってる奴らの味方になりたいと思った。奪う奴らに逆らってやりたいと思った。だから俺はここに、女バスに来たんだ」

一気に気持ちを言葉にした。諸々の事情だとか、整合性だとかを無視して悠太は本心を語った。支離滅裂気味な説明だったが、ソコには不可視の熱が籠もっていた。

「……加納君は本当にバスケが好きなんだね」

智花は少し唖然とした。加納という人間はもっと冷めているモノだと思っていたからだ。

「そうだな。好きだ」

「うん。……うん、ありがとう加納君」

初めて優しい笑顔が悠太に向けられる。

「何のお礼だか知らねえが、どういたしまして。」

悠太も心なしかほどけた表情になる。

「後半も頑張ろうね。私もいっぱいシュート決めるから」

「ああ。湊より決めてやるよ。」

「名前、智花でいいよ。後、負けないよ」

「はいよ智花。俺も悠太でかまわねえよ。後、絶対俺が勝つ」

「でも、わかってると思うけど男バスに勝つのが最優先だからね」

「わかってるよ。その上で、だ」

思わず、二人は顔をほころばせる。そこには歳も性別も関係無い、二人の《プレーヤー》がいた。

「そろそろ後半が始まるね」

「ああ。おっと、そうだ、智花には話しておかなきゃな」

「何を？」

「俺の致命的な――」

――弱点について、さ。

智花と悠太　《小さなエースと孤高なチート》（後書き）

次はいつになるんだろうか……

あと、今期のアニメ面白過ぎ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4773v/

気が付いたら、転生してた……はぁ？

2011年10月12日18時44分発行